

事実みずからがかる

——ある先生の記憶——

富岡倍雄

「オネダイ、オットヘルダイ」という英語を御存知か、ときかれればだれもおどろくだらう。だが、幕末から明治にかけて英語をまなんでいた日本の青年たちは *one day, other day* をまじめにこう発音していたのだという。蘭学が中心で英語の先生のすくなかった時代の勉強の涙ぐましい結果がこれだったのである。

この挿話はわたしが中学三年生のときに毎週教材として配布された英語のウィークリーで紹介されていたものである。わたしの中学三年といえば昭和一九年、戦争はすでに敗色濃厚でB29の偵察空襲がはじまっていた。野球用語がすべて日本語にあらためられたり、電車のなかで英語をよんでいていやがらせをされた話をきいたり、と軍国調はいよいよ強化されてきたが、他方、人や物がすこしづつ街からすがたをけし、世のなががなんとなく意気消沈しているさまを子供ごころにも感じていたようにおもう。そんな御時勢のときに、わたしたちは、英語の時間で、リーダーとよばれる正読本、物語をあつめた副読本、文法と作文をあつかう副読本、という三冊の教科書のほかにこのウィークリーをよまされたのである。

それは、たしか『ABCウィークリー』という名前で、B5版一枚のうらおもて二色刷りの新聞だった。みなれない時事英語がでてくるので心理的には負担だったが、サブマリオンとかトウピードゥなどという言葉はこれでおぼえたのである。なかでも、いまだに鮮烈な印象をのこしているのがアメリカ空軍のヨーロッパ爆撃をさしたカーペット・ボミング（絨毯爆撃）という言葉で、中世以来のドイツの諸都市が一夜にして廃虚と化すさまをありありと想像することができた。この年の秋から日本へもB29の飛来が頻繁となり、わたしたちはそのたびに校庭の防空壕へとびこんだが、高空をとぶB29のすがたをみながら、わたしはあのカーペット・ボミングを連想してしきりに尿意をもよおし、となりの友人が逆にしきりに水をのみにゆくのをみて、こいつ剛胆なやつだな、とおもったりしたものであった。

『ABCウィークリー』は最初はまっしろな上質紙にきれいに印刷されていたが、やがてざらがみとなり、秋にはついに廃刊となったように記憶する。いずれにせよ、この年の十一月には工場に動員されたので、英語の勉強とはわかれることになった。このように戦争もおしつまったときまで英語のウィークリーを刊行したのは研究社であった。そして、そのウィークリーを教材として最後までつかったのが、この年の新学期からわたしたちの英語副読本の担当となった寮佐吉という先生であった。

寮先生は、おおきなごましおのいがぐり頭にいつも鼻の頭までずりおちている眼鏡をかけ、だぶだぶの背広の上衣のポケットに片手をつっこむようにして、背をこごめて教室にはいつてきた。教室にはいつてくると教壇のうえの椅子に腰をおろし、眼鏡のおくから、わたしたちを無言でみまわしておおきくせきこむのがつねであった。よくせきこむので喘息もちの老先生という印象がびったりであった。英語のよみかたにやかましく、「きみのようなよみかたをギナタ流というんだ」といって、しばしばギナタ流の説明をした。そしてそんなとき、「弁慶がナー」といってしばしせきこみ、「ギナタをもってェー」といってまたせきこむ、という風であった。あだ名は「コ」といったが、こ

れがコフという英語からきているのか、咳の擬音からきているのかははっきりしない。しかし、わたしたちが寮先生をよぶときには「コ」というあだなでいうよりも、「寮さん」ということのほうがおおかったようにおもう。「コ」というのがあだなとしてはつかいにくいこともあったろうが、それよりも、「寮さん」とよばれるような雰囲気寮先生がもっていたのだろうとおもう。

勿論、昭和一九年という年にいたってまで先生が研究社の英語ウィークリーを教材として生徒にやませていたというこの社会的、ないしは思想的、意味を当時のわたしたちがしっていたわけではない。腕白ざかりの年ごろの少年であったから、先生をばかにしていい加減な態度をとるものもある。そんなときには、先生は教壇の机のむこうがわにたち、その生徒を机のまえによびつけてたせ、右手を机ごしに生徒のうしろにまわして、「ばか、ばか、ばか」といながら首のうしろや背中あたりに手を前にむかってたたくのであった。たたかれている生徒をふくめて、それは別段こわいという気持をみんなにおこさせるものではなかったが、それでも、それはそこが教室であるということをもみんなにおもいらさせるひとつの行事ではあった。

わたしは、寮先生と、たったふたりでトイレでとなりあわせたことがある。寮先生は糖尿病らしいという噂をきいた直後のことであった。わたしは、先生は糖尿病だからたべたものが糖になっていまでてしまうんだナ、だから身体がよわっているんだナ、とおもいつつ自分の用をたした。というよりも、むしろ、無理矢理にそうおもうように努力した。そうおもっていないと、先生とふたりきりでとなりあっているのがとても気まずくおもえたのである。

この寮先生が、当時すでに著名な寄稿家で、しかも戦争の無謀さをうったえる手紙を各新聞社におくっていた、という事実をしたのは、つい最近の岩波の『図書』十号にかかれた寮先生のお孫さんの文章によって、であった。知らない、ということほどおそろしいことはない、というのが当時腕白少年であった、しかも軍国少年でもあった、わ

たしの悔恨をおびた第一の感慨であった。しかし、同時に、事實は事實みずからかたる、という力づよいおもいもこみあがってきた。

職業から、わたしは第二次世界大戦のことを頭にうかべることがおおく、学生たちにそれをかたる機会もおおい。そういうときにはほとんどかならずといってよいほど、わたしの脳裡にうかぶのは一九六〇年におとずれたドレスデンの廃墟であり、ヨーロッパの中世以来の都市を完膚なきまでに破壊しつくしたあの米空軍の絨毯爆撃である。そして、その絨毯爆撃はかならず「カーペット・ボミング」という英語をおもいおこさせ、その都度あの寮先生の特異な風貌をよみがえらせるのである。寮先生のイメージは、あの第二次大戦というくらい記憶と、そのくらい風景のなかで最後の最後まで英語をまなぶ機会をあたえてくれたという事実と、かたくむすびついていてわたしの心のなかをながいあいだ支配してきた。寮先生のお孫さんから生前の寮先生の社会的活動についてのお話をうかがうまえから、実質的にそのような内容をもつ寮先生のイメージがわたしのなかにできあがっていたのである。

私事にわたるが、一八年まえにわたしは母をなくし、その母の記憶は当然折りにふれてよみがえってくる。他方、寮先生の記憶はほとんど第二次世界大戦をおもうたびごとによみがえってくる。もしかしたら、わたしの記憶をよびもどす総延長時間は寮先生の方がわたしの母よりもながいのかも知れないのである。